

第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

ちょっと気になる日本語の正体

沖縄県

沖縄県立普天間高等学校

2年 喜友名 桃子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

ある日の下校途中、バスの車内で私はふと、「楽しいです。」について考えだした。いつだったかは忘れてしまったが、何かの文を書いていたときに、「楽しいです。」は変な言いまわしだよなど、書くのをためらったが、どう言い換えればよいか考えても思いつかず、結局書いてしまったということがあったのだ。私はさっそくスマートフォンを取りだし、検索フォームに「形容詞＋です」と入力して調べた。それによると、やはり文法的には正しい用法ではないが、「許容」されているようだ。正式にはどう言うのかというと、「形容詞（ウ音便）＋ございます」らしい。つまり「楽しいです。」は「楽しいございます。」となるのだ。疑問点は解決したが、「楽しいうございます。」など使えそうにない。一般的には「形容詞＋です」の形のほうが広く用いられていて、「形容詞（ウ音便）＋ございます」は他の丁寧語より硬い印象を受けさせやすい。上品なマダムならさっておき、高校生の私にはとても似つかわしくない。「まぬかれる」や「おもんばかり」などもそれぞれ「まぬがれる」や「おもんばかり」が許容となっていたりするが、それらに関しては、私だけでも元来の言葉を守らねばと、意識して本来の読み方を使っていた。しかし「楽しいうございます。」は知っていても、やはり高校生の私には使いきれない。ああ、こうして言葉は変わっていくのかと、胸に迫る思いがした。

また別の日、歩道橋を上っているとき私は、「動詞化」について考えていた。「名詞＋る」の形で様々な事柄を動詞にしてしまう。例えば「事故る」などは周りでよく耳にする。ギリギリの時刻で登校してきた友達の一言目は大体、「どこそこが『事故った』」だ。動詞化された造語は全てラ行五段活用と決まっているので使いやすい。しかし、あまり美しいとは思えなかった。「事故が起きていた」ではだめな理由でもあるのだろうかと思えながら、歩道橋を下りていて、あることを思い出した。国語の古文で習った、「漢語＋す」の形のサ行変格活用の動詞だ。そういえば、「死ぬ」と「死す」で混乱した覚えがある。現在の女子高生のように、日々新たな言葉を生み出す存在が昔にもいたのだろうか。もしそうならば、私のように旧来の言葉に執着する人もいたのかもしれない。しかし、私とその人は同じ立場でも、私はその人が嫌がった言葉を旧来のものとして大切にしているのかもしれない。そこまで考えて、私は言葉の変遷に初めてロマンを感じた。

よく「言葉は生きている。」と言われるが、まさにその通りだと思う。毎日この日本のどこかで新たな言葉が生まれる。泡のようにすぐに消えてしまう場合もあれば、定着して辞書に載るものもある。一方で、月日が経つにつれて忘れさられる言葉も少なくない。今を生きる私たちが触れているのは、まさしく今を生きる言葉なのだ。若者言葉を批判する人や、自由奔放に言葉を作る人、全く関心がない人など、言葉に対する姿勢は人それぞれだが、一度言葉と向き合ってみると考え方や感じ方が変わるかもしれない。それは正誤に関わらず、次の瞬間を生きる言葉の一部となるのだ。とても誇らしいことだと思う。間違った日本語が気になっただけでなかった私は、日本語が好きだけでなく消えていく言葉を惜しんでいたときより、日本語の長い歴史のたった一瞬を生きる言葉に触れているのだと思える今のほうが断然楽しく、なにより言葉への興味を深めている。